

台湾の文化外交に関する一考察

— 「無垢舞踊劇場」による『観』の静岡公演をめぐって—

奈倉京子

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第14巻第1号（2015年9月）抜刷

【研究ノート】

台湾の文化外交に関する一考察

— 「無垢舞踊劇場」による『観』の静岡公演をめぐる —

奈倉京子

目次

- I. はじめに
 - 1. 問題意識の所在
 - 2. 考察の対象と調査研究の方法
- II. 『観』にみる「文化」の表象
 - 1. 「無垢舞踊劇場」と芸術監督・林麗珍
 - 2. 林麗珍の舞踏に込める思想・世界観
- III. 台湾による静岡公演の広報活動にみる「文化」の表象
 - 1. 台北経済文化代表処、台湾文化センターの役割
 - 2. 静岡における広報・支援活動
- IV. 観客の受容と三者からみる「文化」の諸相
 - 1. 観客の受容
 - 2. 三者からみる「文化」の諸相
- V. おわりに

I. はじめに

1. 問題意識の所在

本稿の目的は、静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center : SPAC。通称スパック。以下スパックと表記する）が招いた台湾のダンスカンパニー「無垢舞踊劇場」の演目『観』の公演のプロセスを考察の対象とし、文化外交の実現までのプロセスとそこで実践される「文化」の意味について検討することである¹。

台湾では、1987年に戒厳令が解除されて以来、台湾人としてのアイデンティティを醸成・高揚させる動きがでてきた。とりわけ、歴史的にみて台湾社会のなかで周辺化されてきた原住民社会における民族的アイデンティティの自覚と権利の回復に対する

欲求の高まりが注目される。このような状況のもとで、文芸面では、多くの作家が「台湾」を題材に執筆活動を行うようになった。また地方文化の扱いを余儀なくされていた台湾の民俗文化（戯劇、歌謡など）も、政府の文化政策執行機関である行政院文化建設委員会を通じてナショナルな正統文化の一部として認定され、台湾固有の文化の地位向上が図られていった。中国とは一定の距離を置きつつ、独自の「台湾文化」の確立をもって台湾アイデンティティを確立すべきとの声が発せられている [菅野2011: 378 - 380]。

このような台湾アイデンティティの創造の動きを視野に入れながら、本稿では、作品（文化）の創作者（＝無垢舞踊劇場の芸術監督、並びにダンサーによって芸術監督のイメージが形にされ完成した作品全体）、創作された作品（文化）の媒介者（＝メディア、民間組織、半官半民組織）、受容者（＝日本の観客）の三者の立場から、それぞれが表象・想像する「文化」について考察していく。

本稿のキーワードの1つとなる文化外交（パブリック・ディプロマシー）という語は、1965年にアメリカの元外交官エドムンド・ガリオンが初めて公の場で用いた言葉である。「政府が自国の政策を外国に伝達する際に重要なことは、相手国の国民と意見、関心、文化を交換して理解すること、それを（中略）政策決定者に伝えてアドバイスすること、それが政策に反映されること、その結果立案された政策に関して相手国に説明し影響を与えること」である。政府や議員が国家を代表して相手国のカウンターパートと行う伝統的外交とは異なり、政府が相手国の国民に対して行うことが文化外交の最大の特徴である。また近年、政府を介さない国民同士が市民レベルで行う「市民外交」や「民間外交」も文化外交に含める傾向がある [渡辺2011: 22 - 23]。

このような非公式的な民間交流のために利用される「文化」を「ソフトパワー」とする見方がある。「ソフトパワー」とは、「自国が望む結果を他国も望むようにする力であり、他国を無理やり従わせるのではなく、味方につける力」[ナイ2004: 26]であり「強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力である。ソフトパワーは国の文化、政治的な理想、政策の魅力によって生まれる」[ナイ2004: 10]。

文化外交やソフトパワーに関する研究は、文化と外交の関連性の観点から、これまで主に国際政治学、（メディア）文化政策論、国際関係論といったマクロレベルで国際関係を捉えようとする分野で展開されてきた。しかし、そこで語られる「文化」は

1 文化政策学を体系化させようとする根木昭によれば、「文化政策は、国・地方公共団体と一定範囲の責任を持つ社会の合法的な代表者による文化に関わる施策の総体としてとらえられる」[根木2010: 36]。この文化政策の概念に内包される分野として「国際文化交流政策」を位置付けている。「国際文化交流は、国際理解の観点、文化政策上の観点、外交政策上の観点の3つの側面からとらえられる」と言及している [根木2010: 151]。これらの定義を参照すると、本稿で取り上げる事例は、日本と台湾の双方における「芸術文化に係る国際交流の推進」と見做すことができるため、「文化政策」の語を充てることもできるが、本稿では、台湾側が文化（ダンス）そのものを振興させることに加え、外交を展開するためのツールとしていることにより着眼するため、「文化外交」（パブリック・ディプロマシー）の語を一貫して用いることにする。

台湾の文化外交に関する一考察

戦略的・政治的意味が付与されているものとして捉えられているだけで、その担い手と受け手は誰なのか、受け手にどのような影響を与えているのか、魅力的な存在として認知されているのか、といった考察が不十分であった。また、政府を介さない国民同士（非政府機関）が市民レベルで行う「市民外交」や「民間外交」も文化外交に含める傾向があることが指摘されているが十分な理論的・実証的検討が行われているとは言えない [渡辺2011: 22-23]。これに対し、本研究では顔の見える個人・集団の立場から文化外交をめぐるミクロなせめぎ合いを見つめることにより、それぞれの立場から語られる「文化」の意味とその相違を明らかにしたい。とりわけ、文化外交が実現されるまでのプロセスにおける「媒介者」が「文化」に与える影響に着目する。

2. 考察の対象と調査研究の方法

以上の問題意識に基づき、本稿ではスパックが2015年5月のイベントに招いた台湾のダンスカンパニーを考察の対象とし、静岡に来ることになった経緯、台湾の政府・半官半民組織の広報活動、静岡での受容の様子等を見ることにより、表象される「文化」の意味について検討していきたい。まず、簡単にスパックについて紹介しておこう。

スパックは、専用の劇場や稽古場を拠点として、俳優、舞台技術・制作スタッフが活動を行う日本で初めての公立文化事業集団である。1997年から初代芸術総監督鈴木忠志のもとで本格的な活動を開始し、2007年より宮城聰が芸術総監督に就任し現在に至っている。内部組織は創作技術部、制作部、文芸部に分かれている。国際交流事業として、2000年から「Shizuoka 春の芸術祭」を開始し、世界中から演劇、ダンス等を招いて上演してきた。2011年より名称を「ふじのくにせいかい演劇祭」と改めた。海外から招聘する演目をはじめ、年間を通した上演プログラムの選定を担っているのが、文芸部であり3名が所属している。今回、台湾のダンスカンパニー「無垢舞踊劇場」の演目『観』を選定したのは、文芸部の横山義志氏²（西洋演劇研究者）である（スパック公式ウェブサイト並びに横山氏による）。

本稿の内容は、大きく3つの方法—参与観察、インタビュー、資料収集—で得られた情報に基づいている。参与観察とインタビューについて、筆者は2015年4月29日～5月3日までの「無垢舞踊劇場」の静岡滞在期間中、通訳として彼らと親交を深めた³。筆者の仕事は「仕込み」（舞台を作る作業）、「ばらし」（舞台をもとに戻す）、スケジュールの確認のミーティングの通訳や、台湾の制作担当者がスパック側とやり取

2 横山義志氏（1977年生まれ）は、パリ第10大学で演劇学博士を取得後、2007年からスパックで主に海外招聘プログラム（国際演劇祭のための調査・演目提案や海外のアーティストとのやりとりなど）を担当している（スパックウェブサイトより）。現在、静岡大学や学習院大学でも教鞭を執っている。また、「ムセイオン静岡」（静岡県立大学、静岡県立美術館、静岡県立中央図書館、静岡県埋蔵文化財センター、静岡県舞台芸術センター（スパック）、グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）の6つの文化関連機関の協働プログラム）にも協力している。

りをする際の事務的内容の通訳、静岡県文化観光部部長が挨拶に訪れた際の通訳、公演前の観客に向けた『観』に関する展示品の説明や団長の劇団紹介の通訳等であった。その間、休憩時間等に「無垢舞踊劇場」の団長や、技術担当者、舞台監督、制作担当者に話をきいた。加えて、スパック制作部所属で「無垢舞踊劇場」の公演までをアシストした丹治陽氏⁴に、パンフレットや公演後に一般者向けに行ったアンケート、並びに記者会見の出席者などの必要な情報や資料を提供していただいた。さらに、この台湾カンパニーと最初に接触し、日本へ招くことを決めたスパックの横山義志氏に、その経緯等についてインタビューを行った⁵。資料収集については、ドキュメンタリー番組（中国語）と無垢舞踊劇場の制作部がスパックに送った日本語による劇団紹介・林麗珍女史の紹介についての文章、『観』についての紹介文、2014年に台湾国立劇場で公演した時に作成した中国語のパンフレットと劇団が作成した『観』の冊子、並びに日本の舞踊評論家書いた『観』についての評論も参照した。台湾の組織・メディアによる広報活動の様子や報道については、ウェブサイト資料を利用した。

本稿は、作り手が作品を通して伝えたいメッセージについて（Ⅱ）、それを宣伝する媒体が伝えているメッセージについて（Ⅲ）、そして作品を鑑賞する者の受け止め方（Ⅳ）の三者の立場から、『観』をめぐる文化外交の諸相について論じていく。

Ⅱ. 『観』にみる「文化」の表象

本章では、「無垢舞踊劇場」、芸術監督・林麗珍女史並びに『観』について紹介していく。資料は、林麗珍女史について紹介した台湾のドキュメンタリー番組（中国語）と無垢舞踊劇場の制作部がスパックに送った日本語による劇団・林女史・『観』についての紹介文、並びに2014年に台湾国立劇場で公演した際に作成した中国語のパンフレットと劇団が作成した『観』の冊子を参照した。加えて、筆者の関係者に対する聞き取りの内容も引用した。

3 通訳は、台湾出身で焼津在住の黄素英さんとともに務めた。通訳の話をいただいた時、「タイワニーズ (Taiwaness)」ができる人がいないかと横山氏に依頼があったという。筆者はそれが「台語」を指すことを台湾研究者の友人に聞いて知った。それは現在の若者はあまり話せないということであったので、なぜTaiwanessができる人と先方が依頼していたのかが不思議だった。

4 丹治陽氏（1982年生まれ）は、明治大学理工学部建築学科に進学し、建築家を目指していた。同大学4年の卒業制作作業のなかで、演劇人が演劇に対してどのように考えているかを調べたことをきっかけに、演劇に興味をもつようになり、スパックで働きたいと切望するようになった。そこで、2004年4月、静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科に1期生として入学した。2006年4月に職員採用された〔高田・松本編著2013：71〕。現在は営業チーフ。2015年「ふじのくににせいかい演劇祭」では全体の総括も務めた。

5 2015年6月3日の午後、筆者の研究室にて約2時間のインタビューを行った。

1. 「無垢舞踊劇場」と芸術監督・林麗珍

2015年4月28日から5月5日までの期間、スパックの主催する「2015年ふじのくにめぐせかい演劇祭」(2015年4月24日～5月6日)で『観』を公演するために、台湾のダンスカンパニー「無垢舞踊劇場」の関係者37名が静岡へやってきた。日本で上演するのは今回が初めてであった。

「無垢舞踊劇場」は1995年、台北国家戯劇院における『醜』(婚礼のとき酒を供えて神をまつる儀式のこと)の公演を機に正式に結成された。「極めて高貴で純白な絹織物には、その表に同じ色の隠花植物でできた筋が織り込まれ、そして生糸は細密かつ繊細で、僅かの不純物も含まれないものがある」と言い伝えられている。このような絹織物には『白無垢』という美しい名がつけられており、『無垢舞踊劇場』の名もこの伝説がもとになっている。「無垢舞踊劇場」は、海外へ活躍の場を広げている。1997年のフランスのヴァレドラルマルヌ・ダンスビエンナーレでの公演を皮切りに、1998年にはフランス・アヴィニョン演劇祭に正式に招かれて公演を行い、2000年には『花神祭』がフランスのリヨン・ダンスビエンナーレで最優秀観客賞に選ばれた。翌年、スペインのマドリッドで開催された秋の芸術祭で観客動員数の最高記録を打ち立てた。2008年6月には、中国文化部の招待で北京五輪芸術祭に参加し、公式に北京国家大劇院から招待を受け公演した芸術文化団体としては台湾で初めてであった(中国語パンフレット・日本語紹介文による)。

芸術監督である林麗珍もまた、「無垢」のごとく、純粹かつ完璧主義な姿勢で芸術を追求してきた。20年間で僅か3作品(『醜』、『花神祭』そして『観』)のみをじっくりと手掛けてきたことから窺える。団長であり夫の陳念舟氏は「もっと多く作品を作るべきだと主張し、妻と離婚しそうなくらい喧嘩をしたことがある。大きな作品だけでなく、小さな作品もいくつか用意しておくように助言した。でも妻はなかなか同意してくれなかった」と述べる。また陳氏は「妻はダンサーにとっても厳しいので、フランス人から彼女は厳しすぎるので地獄行きになると言われたことがある」とも話していた⁶。これらの言葉から、林女史の創作活動に功利的目的はなく、ただ純粹に良い芸術作品を作ることのみに専念してきたことがわかる。劇団の経営・運営や宣伝については夫が代わって担っており、夫婦で協力し合って劇団を維持させている姿が窺えた。

林女史は台湾・基隆に生まれた。中国文化学院舞踏学科を卒業後、長安女子中学で教職に就いた経験もある。現在は舞踏家、振付師、服飾デザイナーとして活躍している。夫の陳氏によると、「彼女は西洋舞踊から出発し、東洋人の身体に合うような舞踏を創り出すことへ移行していった」という。これまでいかなる国外の著名な舞踏家

6 陳念舟氏がスパック職員、通訳の黄素英氏、筆者にお茶を入れてくれながら、「無垢舞踊劇場」のこれまでの活動や妻で舞台芸術監督の林麗珍女史について話をしてくれた(2015年4月29日の午後、スパックにて)。

にも師事せず、国外の舞踊団に参加したこともない。しかし彼女の「台湾の大地に根付く文化と大自然を題材にした舞踊作品は、芸術面で独特のスタイルを打ち出しており、引いては国際的な舞踊界からも高い評価を受けている」。実際、2002年、独仏共同出資のテレビ局のアルテ（ARTE）が選考した今世界で最も特色のある8人の振付師のひとりに選ばれた。続いて2005年には台湾から国家文芸賞を受賞した（中国語パンフレット・日本語紹介文による）。

林女史は1982年から1989年にかけて、出産・育児のために一旦振付の仕事から離れていたが、その休業がむしろ復帰後の創作活動を充実させる有意義な充電期間になったと振り返る。充電期間、彼女は台湾独自の伝統文化が急速に失われていくのを憂い、同様の考えをもつ仲間とともに、原住民の音楽舞踊と台湾民間風俗を収集するためのフィールドワークに出かけた。これにより、台湾の先人が築いた土地開拓の血と涙の歴史、縁日の祭にみられる迎神の儀、祭祀儀礼や祭礼祈祷で詠われる民謡などに触れ、このような台湾の民俗・生活文化は、「無垢舞踊劇場」の芸術理念の礎となった。1989年、彼女が復帰後、最初に手掛けた『天祭』は、「充電期間に培った民俗的祭礼への思いと記憶を形にほかに、地元文化への帰属意識を呼び起こした」と紹介されている。加えて、「台湾という土地への思いは、漢民族とは異なる思考手法で1991年に『ブヌン族音楽舞踊編』として表現した」とある（中国語パンフレット・日本語紹介文による）。

筆者は、「無垢舞踊劇場」のメンバーの準備の様子やダンサーと林女史のやり取りなどを見て、この劇団が単にエンターテインメントを提供するものとして存在しているだけではなく、劇団そのものがまるで「林麗珍教」を信仰する一つのコミュニティもしくは生活集団のような印象を受けた。それは、林女史の服装、立ち居振る舞いといった個人のみならず、舞台のセッティング前やリハーサル前に劇団のメンバー全員で必ず行う祭天の儀式や「心経」の音読などから感じられた。それは以下で紹介する林女史の舞踏に込める思想と深い関わりがある。以下では更に一步踏み込んで林女史の思想・コンセプトに迫ってみたい。

2. 林麗珍の舞踏に込める思想・世界観

林女史の舞踏は、既存のいかなるジャンルにもカテゴライズしがたい正に「林麗珍の舞踏」である（陳氏聞き取りより）。彼女は身体性にこだわっており、それは2つの特徴に集約することができる。1つは「動いて動かざるが如し、動かずして動くが如し」。もう1つは「静、定、松、沈、緩、勁」（静める、落ちつく、力を抜く、腰を据える、ゆるめる、力を入れる）の6つの修身と養生の道理である。舞台稽古は「ただ座ること」「ただ歩くこと」を基礎としている。「力を抜き、信じること、こうして初めて身体を開放することができる。落ち着き、力を抜き、安静にすること、そうすると身体の声は自ら進み、螺旋の状態から身体を動かし、内在の感覚にしたがって進

台湾の文化外交に関する一考察

み、秘密を探し求めてくれる。もし内在の感覚がなく人が行う美しいと思う動作を真似たとしても、それは必ずしも自分の身体に合うとは限らない」と林女史は語る（ドキュメンタリーより）。

このような独自のこだわりから「林麗珍ワールド」を構築してきたのであるが、その演目を観ると、どこか日本の能や歌舞伎に似た動作がみられる。そして、身体性のこだわりは、土方巽をはじめとする日本の「舞踏」（ぶとう）も想起させる。「2015年ふじのくに⇒せかい演劇祭」を紹介するパンフレットに寄稿された舞踊評論家・石井達朗の「祭祀からコンテンポラリーな時空に向けて～『観』をめぐって思うこと～」の中でも、「腰から両足裏まで地に密着した重心の低さは、日本に根付いた伝統的な身体性と縁戚関係にあり、思わず親近感を覚える」、「異なった角度の前屈した姿勢をつかひわけ、舞台空間の縦線と横線を交錯させる踊り手たちの移動は、演出・振付の観点から見れば複雑であるわけではない。むしろ単純すぎるほどである。そしてこの簡潔さは、多くのアジアの祭祀の空間と身体に通底するものである」と述べられている。

『観』は「観照」のことである。「観照」を『現代漢語大辞典』で引くと、「仏教用語。世界を静観することを指し、智慧を以て物事をきちんと理解すること」とある。抽象的な概念であるが、『観』が具体的にどのような情景や内容を表そうとしているのだろうか。残念ながら、ドキュメンタリービデオのなかでも『観』のあらすじについては詳細に語られていない。ただ、『観』は「一筋の消えゆく河とふたりの兄弟の物語」、人類の自己に対する欲望と土地の集合的記憶を表現している」等と抽象的な説明がされているだけである。林女史もビデオのなかで「神話は本来集合的記憶であり、私はそれを鷹に化けさせた。そのような鷹は神性を帯びている」と述べているだけで、語られているのはもっぱら『観』を演じるために「身体」をどのように作り出すのかということだけである。林女史の夫で団長の陳氏によると、「彼女は事前に物語について詳しい説明をすることは避け、観客一人ひとりが自分なりの解釈をしてほしいと考えている」という（陳氏のプレトークによる）⁷。

『観』の主題について、ドキュメンタリービデオのなかでいくつかの言及がある。観は土地、水、命と関係している」、「人類と自然の相互作用を表している。大地でこれを用い、大地でこれを取る。最後に依然として大地の天道循環に回帰していく」等と紹介されている。人と土地との深い関わりと土地の循環の普遍性を表現しているのである。舞台を摺り足でゆっくりと進むことは「土地とともに歩く、そうするとあなたのすべてを土地に捧げている感覚を覚える。その身体の感覚は水と同じくらいしなやかである」ことを表現している。『観』の全編のDVDを観ると、まず親子が河で石を積み上げるシーンが出てくる（後に、子どもが大きくなったのでこのシーンはカッ

7 「プレトーク」は、公演直前に、関係者が15分～20分程度演目について紹介する時間のことである。

トしたとのこと)。これについて林麗珍のドキュメンタリードラマのなかで「河の石には靈魂と生命が宿っており、永遠に河の流れを見守っている」と紹介されている。ここからも、アニミズム的思想、人が自然（土地）によって生かされていることを具現化していることが見て取れる。

このように、林女史が表現しようとしているものは、ある特定の文化というよりも人類に普遍的な人と土地との関わりであるのだから、作品の中には「台湾文化」の独自性もみられると、ドキュメンタリーでナレーションが紹介している。しかし一方で、ダンサーの服装は、苗族、侗族等の少数民族のものを取り入れていることや、ダンサーが全身をペンティングしていることが中国（大陸）の閩南文化の伝統的な祭祀の時に行われていた習慣からきていることも紹介されており、「台湾文化」の混合性も示されている。

『観』は『醮』、『花神祭』を含む三部作となっているが、これらは「儀式劇場」と形容されている。『観』では、ダンサーが3時間もの時間をかけて全身にペンティングをするが、それはただの演出効果のための行為に留まらず、この時間はダンサーにとってある種の「儀礼」のプロセスである。無言で行い、性格も変わっていくという（ドキュメンタリー、陳氏インタビュー）。舞台稽古やリハーサルの前にも「心経」を唱えるなどの儀式を行うが、これらの行為から、作品と演じる時間（非日常）とそれ以外の時間（日常）との間の境界が明確に線引きされているわけではないということが出来る。林女史の「観を演じる身体をつくる」という言葉に込められているように、ダンサーは、日常のなかでも『観』に生きており、そうでないと『観』を演じることができないのである。このような意味においては、「儀礼」という非日常的な表現はふさわしくないのかもしれないと筆者は考える。

このようにみえてみると、林女史自身が語る『観』の内容には「台湾独自のもの」はほとんど見られないのに対し、それを客観的に紹介するもの（パンフレット、ドキュメンタリーに出てくる林女史以外の人物の語り、ナレーション等）の語りは「台湾独自のもの」を基礎とした説明になっていることがわかる。以下では、「無垢舞踊劇場」および『観』が、当事者から離れたところで誰がどのように伝えているか、ということのみていきたい。

Ⅲ. 台湾による静岡公演の広報活動にみる「文化」の表象

1. 台北経済文化代表処、台湾文化センターの役割

「無垢舞踊劇場」が静岡にくることになったきっかけは、2012年10月にスパック文芸部の横山義志氏が台北経済文化代表処所属の台湾文化センター⁸の企画する台湾劇場見学ツアーに招待されたことであった。スパックは以前に2回台湾の人形劇を上演

台湾の文化外交に関する一考察

していたこともあり、台北経済文化代表処とは知り合いであったため、このような企画に声がかかったそうである。2012年のツアーは10月17日から22日までで、横山氏ひとりのために企画され、費用はすべて先方もちで、通訳も付けてくれた。台北、高雄、台南等複数の場所への案内を受け、カンパニーを見て回った。食事の場所も事前に決められており、そこには台湾文化部の管理職の方も同席した。

台湾の市場だけではカンパニーを経営していくことは難しく、台湾国内の文化政策の費用も少ないため、海外で活躍できるようになって初めて、台湾国立劇場が支援をしてくれるのだという。そのため、どのカンパニーも必死で海外の関係者にアピールをし、海外公演のチャンスを獲得したいと思っているため、今回、横山氏が訪問した時も、彼一人のためだけにお芝居を見せてくれたカンパニーがいくつかあった。そのうち「無垢舞踊劇場」は約1時間のダンスを見せてくれた。その後、ダンサー全員を集め、林女史が横山氏にみんなの前でコメントをしてほしいとお願いしたそうだ。

横山氏は、『観』を「時間をかけて研ぎ澄まされた作品。無駄がない」、「劇団を持つものにしか作れない作品」と高く評価している。2012年当時、招聘したいと思ったが、公演料に折り合いがつかず、最初の招聘の試みは流れてしまった。今回は台北で助成金が得られたので来日することができた。

以上の経緯からみると、台北経済文化代表処ならびにその下部組織の台湾文化センターが大きな役割を果たしているといえる。この台北経済文化代表処とはどのような組織なのだろうか。「台北駐日経済文化代表処」公式サイトによると、「台北駐日経済文化代表処は、中華民国（台湾）の日本における外交の窓口機関である。民間の機構ではあるが、実質的には大使館や領事館の役割を果たしている。国際情勢の変動から1972年9月29日、日本と中華人民共和国が国交を成立させたことに伴い、中華民国（台湾）と日本の国交が断絶した。しかし、中華民国（台湾）と日本の関係は深く、貿易、経済、技術、文化などの交流面で今まで通りの関係を保ちつづけるための実務機関として同年12月、中華民国（台湾）側に「亜東関係協会」、日本側に「財団法人交流協会」を設立した。そして、亜東関係協会と交流協会は、相互に在外事務所を設置する取り決めに調印した。この取り決めに基づいて中華民国（台湾）と日本の両国は、お互いにそれぞれの権益を保護し、ビザ発給をはじめ貿易推進、学術・文化・スポーツ交流などの業務を行い、今まで通りの両国の深い関係を維持している」とある。この内容から鑑みると、大使館・領事館に相当する機関とわかる。東京以外にも、横浜、大阪、福岡、那覇、札幌には弁事処、分処が設置されている。

台湾文化センターは、台北駐日経済文化代表処に属している。2010年に設立された。「台日文化交流のプラットフォームとなり、台湾の芸術や文化関連の団体およびその内容を広く紹介し、国際的な文化交流への参加を図り、民間基金会・NGO組織など

8 2015年6月より「台北文化センター」から「台湾文化センター」へと改名された。

に台日文化交流への参加を協力するとともに、芸術・文化の各団体、美術館、博物館などによる台日交流に協力するなど広範な活動を行っている」と紹介されている。加えて、方針欄には「文化を大使として、国際文化交流の推進」、「台湾の価値輸出の促進」を堅持すると書かれている。これらの内容からみると、文化外交を担う機関であることがわかる。

台湾文化センターは、台湾文化部とも関係のある機関である。台湾文化部は、「中華民国（台湾）行政院に所属する省庁の一つで、その傘下には7つの業務司（局）、5つの補佐機関、1つの常設法規会、19の付属機関、および、10の在外文化機関が置かれている。……文化部は文化芸術をつかさどる最高行政機関である」と公式サイトで紹介されている。台湾文化部の公式サイトに入ると、台北駐日経済文化代表処台湾文化センターのページにもつながるようになっており、活動の様子を知ることができる。

台北文化センターは6月12日より「台湾文化センター」と改名した。その時オープニングセレモニーとして「台湾ウィーク」が開催された。台湾文化部の公式サイトに掲載された事前の宣伝記事を見ると、「台湾民謡が東京で土着の香りを放つ」と見出しが付けられ、「南管や閩南、台湾原住民、客家歌謡のパフォーマンスグループが台湾の最もパワフルな音楽を披露し、台湾文化の真髄と素晴らしさを日本の観客に伝えます」と紹介されている。加えて、文化部の洪孟啓部長が6月3日に行った記者会見で「台湾は中華文化が集積した豊かな土地で、閩南人や客家人、台湾原住民らによってさらに多様で豊かな養分が加えられました。自由で民主的、開放的な思想と創造性もあります。文化部はこれらの素質を国際社会や日本の人々に伝え、広めていきたいと考えています」と述べたことを紹介している。このイベントには、「無垢舞踊劇場」も招待されて12日の開幕式の前に『醮・献香』を上演したという（台湾文化センターウェブサイトより）。これらの内容からみると、台湾文化部という政府機関と繋がりを持つ半官半民の性質の台北駐日経済文化代表処ならびに台湾文化センターが、ソフトパワーの「台湾文化」を広めていく役割を担っていることがわかる。

このような性質をもつ半官半民の機関は、大陸にもみられ、同様の機能と役割を有している。とりわけ、僑務政策の点で類似している。台北経済文化代表処の「僑務部」の業務内容をみると、「1、管轄内の僑務委員会に対する指導および僑胞の活動に対する支援と協力。2、華僑学校の指導および華僑教育の推進。3、政府の僑務政策の宣伝と僑胞に関する活動の開催。4、僑胞に関する業務の宣伝と協力。5、僑胞の帰国進学への指導。6、行政院僑務委員会と協力し、語学クラス、ビジネスクラス、料理クラス、海外華僑青年の台湾研修旅行の開催。7、在日僑胞の救難救助」となっている。これらの内容から、大陸の華僑联合会（通称「僑聯」）と性質を同じくするものであることがわかる。僑聯は帰国華僑や海外華人の国内の家族や海外華人を対象に、日常生活に必要な様々なサービスを提供し、また帰国華僑と海外華人の架け橋の役割

台湾の文化外交に関する一考察

を担う、半官半民の仲介的組織である。僑聯は中央政府、省、市、県、鎮、村にそれぞれ存在する。中国には帰国華僑や海外華人の国内の家族や海外華人のために政策決定をしたり、サービスを提供したりする組織が僑聯を入れて5つある。帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人に関する法律を最終決定する「全国人民大会華僑委員会」、「1つの中国」を香港、マカオ、台湾に向けて宣伝するために、中国人民政治協商会議第9回全国委員会常務委員会の下部組織として設置された9つの専門委員会の1つである「全国政協港澳台僑委員会」、帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人に関する法律・政策を決める「國務院僑務弁公室」、帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人の声を反映させた政策提言をする「中国致公党」、そして帰国華僑聯誼会である[毛起雄・林曉東1993]。他の組織は完全に政府機関に属するため、海外華人に向けた政治的活動をしにくいのが、僑聯は政治的権力がなく、政治的宣伝(例えば「1つの中国」の方針等)がしやすいという特徴がある⁹。

つまり、台北経済文化代表処も僑聯も海外の「僑胞」と台湾をつなぐ仲介者的な機関であり、政府の華僑政策の宣伝も含めた「文化」を海外に居住する華僑ならびに彼らと親交のある現地の人々へ向けて発信しているという点で共通している。一方、政治的には「1つの中国」のなかで、同様な性質をもつ機関によって「外交」がなされているということは、それぞれがお互いの政治的・文化的面での差異化を図っているという見方もできる。

2. 静岡における広報・後援活動

『観』の公演に先駆けて、2015年5月1日にスパックにて記者会見が行われた。出席者は表1の通りである。

9 また、僑聯の特徴は、帰国華僑、海外華人の国内の家族や海外華人に対して様々な相談に柔軟に対応し、手助けをしているところにある。よくある相談は、帰国華僑が海外へ親戚訪問に行く場合の手続きに関することである。帰国華僑が海外にいる家族・親戚を訪問する場合、公安局に提出までに海外の家族・親戚と交わした3通以上の手紙、帰国華僑証明書、無犯罪証明などの書類を提出しなければならないが、僑聯が手続きに必要な書類や申請方法の説明や手続きの代行を行っている。これ以外にも、僑聯は個別の悩みにもできるだけ対応している。例えば、福建省僑聯に次のような相談者が訪れたことがある。華人の男性の中には、中国の出身地と移住先国の双方で妻を娶った者が多く見られる。ある福建省晋江出身の男性が晋江で妻を娶った後、フィリピンに移住し、そこでも現地人の妻を娶った。夫はフィリピンで亡くなり、フィリピンで墓を造った。2008年に晋江の妻が亡くなり、その子どもたちがフィリピンの夫の墓を探して一緒に遺骨を埋葬したいと思い、僑聯に相談にやってきた。中国とフィリピンの家族の間では親交がなかったため、子どもたちは父親の墓がどこにあるのかわからなかった。そこで福建省僑聯はフィリピン晋江同郷会に連絡をし、情報収集を始めたところであった。帰国華僑はしばしば僑聯を「娘家」(妻の実家の意味)と表現する。つまり、僑聯は帰国華僑にとって困った時に頼れるところである。同時に僑聯は、海外華人と帰国華僑並びに中国政府を非公式な連携を結ぶための媒介機関となっているのである[奈倉 2011: 21-25]。

表1：2015年5月1日の記者会見出席者

| | メディア | 民間（半官半民）組織 | 行政 |
|----|--|--|---|
| 台湾 | 台湾メディア <ul style="list-style-type: none"> ・台湾新聞 ・中國時報（東京支局の駐日特派員） ・中央通訊社 ・台湾テレビ | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター <ul style="list-style-type: none"> ・顧問兼台湾文化センター長 ・広報部 主席課長 ・広報部 台湾週報 | |
| 日本 | 日本メディア <ul style="list-style-type: none"> ・静岡新聞 ・朝日新聞 ・中日新聞 ・共同通信 ・静岡朝日テレビ | 静岡日台友好協会 <ul style="list-style-type: none"> ・会長 ・理事 | 静岡県企画広報部 地域外交課 <ul style="list-style-type: none"> ・課長代理 ・主査 |

（注）スパック制作部の丹治陽氏からの情報を基に筆者作成。

台湾側のメディア出席者が多く、台湾文化センターの上層部の出席も見られることから、今回の「無垢舞踊劇場」の静岡公演を重視していることがわかる。『観』の公演終了後、複数の台湾メディアが「無垢舞踊劇場の公演は日本の芸術界を震撼させた」といった記事を紹介した¹⁰。

メディアの注目以外に興味深かったのは、日本中華総会（横浜華僑総会）並びに静岡の台湾人の関心が見られたことである。『観』の公演中、中華総会からはリングの差し入れやお祝いの花が送られてきた。公演当日も、中華総会のメンバー数人が観劇に訪れていた。また、スパックでのリハーサルや公演の期間、台湾側の制作部がとくに気を使っていたことの一つにダンサーの食事の問題がある。ダンサーのなかには菜食者も多く、菜食者用と非菜食者用の弁当の二種類が必要なことや、温かい弁当を用意したいなどの細かな要求が多くあったが、その際にも、静岡の台湾人が営むレストランを台湾出身の通訳を通して紹介してもらい、融通を利かせて弁当を準備してもらっていた。

こうして国家レベルから地域レベルに至るまで、「無垢舞踊劇場」による『観』の静岡公演は、台湾の劇団、文化を代表するものとして捉えられ、宣伝・後援されたのであった。ただし、ここで忘れてはならないのは、台湾側の宣伝のみならず、スパックが日本側の文化伝達の媒体者として、日本（静岡）の観客にどのようなイメージを与えるかという点で重要な役割を担っているということである。

10 例えば、台湾新聞 <http://blog.taiwannews.jp/?p=26257> [2015.05.05]、中央通訊社 <http://www.cna.com.tw/search/hysearchws.aspx?q=%E7%84%A1%E5%9E%A2%E8%88%9E%E8%B9%88%E5%8A%87%E5%A0%B4&type=&channel=0> [2015.05.03]、中時電子報 <http://www.chinatimes.com/realtimenews/20150504004206-260408> [2015.05.04]、兩岸文創誌 <http://tccanet.org.tw/news-282.html#.VVxxyI7tmko> [2015.05.03]、非華文教服務中 <http://www.ocac.gov.tw/OCAC/SubSites/Pages/Detail.aspx?site=3117a715-f7a7-4821-ba75-ab93badf8d20&nodeid=1109&pid=60088> [2015.05.10] 等。

IV. 観客の受容と三者からみる「文化」の諸相

ここまで、『観』の作り手とその作品、そしてその広報についてみてきた。では、それを受容する者はどのように感じとり、理解したのであろうか。以下ではスパックが行った公演後のアンケートの内容と評論家による記事を参考に、作り手、媒体者、受容者の三者から『観』にみる「文化」の相違点を検討してみたい。

1. 観客の受容

『観』の公演は2015年5月2日、3日の2回行われ、スパックの劇場400席のうち、一日目は約70%の席が埋まっており、2日目はほぼ満席であった。横山氏によると、2015年の演劇祭の演目のなかで最も反響のあった作品だということである。公演後、10名がアンケート記入に協力した。2日間の観客数から見ると、この少数回答のアンケートの意見のみから受容の様子を一般化することには限界があるものの、その集計表から観客の率直な感想を知ることができた。それらをまとめてみると、まず、『観』の公演を高く評価しているものが多く見られた。例えば「一見に値する見応えのある公演だった」、「鍛え上げられた肉体でのみ表現できる舞踊だ」、「実力のある人たちの公演で目を見張った。ある種の覚悟した公演だった」、「良いものをみたという印象。素晴らしかった。美しかった」等の記述が見られた。次に、内容をどのように捉えているかという観点から見ると、具体的な内容にまで踏み込んでコメントしているものはほとんどなく、よく理解はできないが外観に圧倒されたという種の感想が多く見られた。例えば、「動と静にキレがあった」、「静かなスタートから激しい戦いまで身体表現のすさまじさを経験できた。理解できない感動に包まれていて素晴らしかった」、「経験したことのない世界を感じた。祝祭か？鳥の衣装か？何族かわからないがスカートのようなものを身に着けていて、動きが美しい」、「引き伸ばされた時間の中での白鳥の死のあたりから、何かすごいものを見ている感がどんどん増していった」といったコメントである。他方で、高く評価している人と同じ人が「しかし同時にとても眠気をもよおした」、「しかし2回ほど寝てしまった」と極端とも取れる感想を書いているのが気になった。最後に、どのような文化と捉えたかという点から見ると、「宗教・信仰の中に芸術があるのか、芸術の中に宗教・信仰があるのか？」というように、ある特定の地域や民族を想起するのではなく、ある種の宗教性を想像したと取れる記述が見られた。台湾に触れたものは「尺八は台湾にもあるのか？」という記述のみであった。

以上の結果から見ると、観客にとって『観』はある特定の地域や民族を想起させるものではなかったと言える。視覚的に迫力のあるものであったという感想に留まり、ストーリーや主題にまで踏み込んだ感想やコメントにまで及んでいない。『観』とはどういう意味なのか？」という記述すら見られた。

更に、公演後に舞踊評論家の石井達朗氏が『ダンスマガジン』に寄せた『観』の評論を参考にしてみたい。石井氏は、「極限にまで抑制され、高度に抽象化された身体技法に基づきながら、神話的・民話的なヴィジョンに溢れた祭祀空間を実現」、「愛、宇宙、神、トーテム（動植物信仰の象徴）などを思わせるシーンがあるが、物語性に寄りかかるとはならない」、「フォークロアのヴィジョンをこのような形で現代の舞台に定着させる仕事は例がないだろう」等と評している。つまり、『観』をアニニズム的世界観が反映された「祭祀」空間と捉えており、特定の地域・国家・民族を越えた普遍的に存在する信仰をオーセンティックな儀礼として舞台に体现させたものとして理解したと見ることができる。

2. 三者からみる「文化」の諸相

すでにみてきたように、パンフレットや広報のなかで、林女史の創作は「台湾の大地に根付く文化と大自然を題材にした舞踊作品」、「台湾の常民文化の観察に基づいている」と紹介されているが、作り手の林女史の意図するところは、「台湾常民文化」の原初性の表象や、土着性への回帰だけではない。『観』についての舞踊評論家・立木燐子さんの林女史に対するインタビューのなかで、林女史のダンスは何から影響を受けたのかという質問に対し、「何から影響を受ける、または何に影響を与えるというのではなく、互いに影響し合う関係にあると捉えるべきだ」と答えたという。この言葉に加え、先に紹介した彼女の世界観から推し量ることができるのは、台湾の土着性を基礎として想像される人類と自然の精霊とのインタラクションの普遍性を、アジア、ヨーロッパなどのすべての人が、それぞれの文化的価値体系のなかで想像し、自分の中に落とし込むことを期待しているということではないだろうか。

『観』をめぐる、作り手と媒介者の間にみられる文化の表象の相違について、スパックの横山氏は、「アーティスト側からすると、台湾文化を参照しているが、アイデンティティへのこだわりはなく、自分の生まれ育った土地を掘り下げることで普遍性を探し出そうとしている」、「日本人には台湾文化のイメージはあまりない」と話す。実際に、日本（静岡）の観客の受けとめ方からみると、『観』を台湾独自の文化を表現したものとは理解していない。このように、三者がそれぞれの立場から表象・イメージされる「文化」は異なる様相を示している。

V. おわりに

「文化」を政治的に利用し、「台湾文化」の独自性を広めることによって台湾に対する良好なイメージを作り上げていくことが台湾政府の文化外交の目的である。そのプロセスの中で重要な役割を果たしているのが「媒介者」である。『観』をめぐる台

台湾の文化外交に関する一考察

台湾文化センターの広報活動は「台湾アイデンティティ」の創造の潮流を背景とし、その中核となりうる「台湾独自の文化」を広めるために重要な「媒介」機能を発揮しているのである。例えば、台湾文化センターをはじめとする台湾側の関係者が作成した紹介文に「地元文化への帰属意識を呼び起こした」や「漢民族とは異なる思考手法で表現」といった文言が頻出していることや、林女史が「1980年代から90年代にかけて、台湾民俗文化を保存するためにフィールドワークを行った」という文面から窺える。そして（「台湾文化」と称するものが、中国福建省の閩南地方の客家文化等に起源をもつことに言及されてはいるものの）中国（大陸）との差異化を図るために、「台湾のオリジナリティ」を模索しているのである。その「文化」の内容と受容者が理解する「文化」のそれとは必ずしも一致しないことを本稿の事例は示しているのである。

但し、「無垢舞踊劇場」のダンサーの洗練されたレベルの高いパフォーマンスを目の当たりにした日本の関係者が、台湾の文化力の高さを感じたことも事実である。つまり、台湾の劇団が静岡で公演を行ったことそのものが文化外交の効果となる側面もある。

最後に、静岡や横浜に居住する台湾出身の華僑華人による個人的・組織的な支援や宣伝が見られたことが興味深かった。佐藤卓己は「メディア」（＝中間・媒介）について、「情報媒体であっても広告媒体ではない手紙、音楽、電話はもちろん、書籍、レコード、写真も長らくメディアとして意識されることはなかった。とはいえ、消費社会とはすべてのモノ、コト、ヒトが広告媒体となる社会であり、その発展とともにメディアという言葉が示す対象は拡大してきた」と述べている〔佐藤2012：20〕。移民も文化の媒介者となりうることを本稿の事例は示唆している。この点について本稿では詳しく論じることができなかったが、今後、他の事例も考慮しながら議論を深めていきたい。

【付記】

本稿は科学研究費若手研究（B）（H 26～H 29）「中国の文化政策と華人ネットワークの援用・創出に関する実証的研究」（代表者・奈倉京子）の成果の一部である。

本稿執筆にあたり、スパック制作部の丹治陽氏からは多くの情報・資料を提供していただいた。加えて、文芸部の横山義志氏は、筆者に通訳の貴重な機会を与えてくださり、インタビューにも応じていただいた。最後に、浅間哲平氏（フランス文学・文化研究専門）から、芸術作品の受容研究の方法についてアドバイスをいただくとともに、本稿の構成について建設的なコメントをいただいた。ここに感謝を記したい。

【参考文献】**文献**

- 石井達朗 (2015) 「祭祀からコンテンポラリーな時空に向けて～『観』をめぐって思うこと～」『演劇祭』静岡県舞台芸術センター、pp.46-48。
- (2015) 「無垢舞踊劇場『観～すべてのものに捧げるおどり～』」『ダンスマガジン』8月号、新書館、p.91。
- 根木昭 (2010) 『文化政策学入門』水曜社。
- 佐藤卓己 (2012) 「はじめに『メディア文化政策』とは何か」佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文編『ソフト・パワーのメディア文化政策』新曜社、pp.9-23。
- 菅野敦志 (2011) 『台湾の国家と文化：「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房。
- 張原銘 (2004) 「台湾におけるポストコロニアル文化研究の現状と課題—陳芳明の『後殖民台湾』を読む—」『フォーラム現代社会学』3：108-121。
- ナイ、ジョセフ・S著・山岡洋一訳 (2004) 『ソフトパワー—21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞出版社。
- 奈倉京子 (2011) 『中国系移民の故郷認識—帰還体験をフィールドワーク』風響社。
- 毛起雄・林曉東 (1993) 『中国僑務政策概述』中国華僑出版社。
- 渡辺靖 (2011) 『文化と外交—パブリック・ディプロマシーの時代』中公新書。

内部資料

- 高田和文・松本茂章編著 (2013) 『SPACの15年—静岡県舞台芸術センターの創造活動と文化政策をめぐって』静岡文化芸術大学報告書。
- 「無垢舞踊劇場『観』」(2014年9月に台湾国家戯劇院で公演した際のパンフレット)。

映像資料

- 『観』(2014) 三映電影文化事業有限公司製作、国立中正文化中心発行。

ウェブサイト資料

静岡県舞台芸術センター (スパック) 公式サイト

<http://spac.or.jp/about>

台湾新聞

<http://blog.taiwannews.jp/?p=26257> [2015.05.05]

台湾文化部

<http://www.moc.gov.tw/>

台湾の文化外交に関する一考察

台湾（台北）文化センター

<http://jp.taiwan.culture.tw/>

中央通社

[http://www.cna.com.tw/search/hysearchws.aspx?q=%E7%84%A1%E5%9E%A2%E8%88%9E%E8%B9%88%E5%8A%87%E5%A0%B4 &type=&channel=0](http://www.cna.com.tw/search/hysearchws.aspx?q=%E7%84%A1%E5%9E%A2%E8%88%9E%E8%B9%88%E5%8A%87%E5%A0%B4&type=&channel=0)

[2015.05.03]

中時電子報

<http://www.chinatimes.com/newspapers/20150504000431-260115> [2015.05.04]

兩岸文創誌

<http://tccanet.org.tw/news-282.html#.VVaxyI7tmko> [2015.05.03]

菲華文教服務中心

<http://www.ocac.gov.tw/OCAC/SubSites/Pages/Detail.aspx?site=3117a715-f7a7-4821-ba75-ab93badf8d20&nodeid=1109&pid=60088> [2015.05.10]